

2016年8月1日

監査役会通信 (No.5)

社外取締役
栄木憲和

「新薬創出について考える」

日本は米国、英国に次いで世界で第3位の新薬創出国だという。

1980年から1990年代には日本発の世界的な大型新薬（メパロチン、クレストール、クラビット、ハルナール、プログラフィ、アクトス、アリセプト、プロプレスなど）の特許が登録されたが、2000年以降の大型新製品はオプジーボ（2005年）のみである。これから10年先を俯瞰すると、日本発の新薬で売上金額世界トップ50位に入るのは、オプジーボを入れて数品目だけである。

医薬品以外にもこの時期、日本発の画期的な発明・発見を挙げることができる。例えば、ウォークマン（1979）、イベルメクチン（1981）、CD・CD-R（1982）、発光ダイオード（1993）、ハイブリッド車（1997）などである。顕著な例は1980年代、一時はアップルやインテルを駆逐し世界の半導体市場の80%を占め、テレビ市場を支配した日本の電機・電子産業は今や見る影もない。急激な環境変化が起こる中で、衰退する産業があれば、それに代わる新しい産業・企業が勃興されると言われるが今の日本ではそれが実現できていない。

医薬品産業を振りかえると、低分子医薬品の成功体験は、希少疾患・ガン領域など高分子医薬品開発にシフトする時期を逸し、また国内市場重視の経営が現在の新薬枯渇の現状を招いた。なぜこのような事態に陥ったのであろうか？

革新的な新薬の開発が成功した時期は団塊の世代が世界で大いに刺激を受け、活躍をした時代である。当時は、世界水準の研究を目指して、大学の研究者・製薬企業の若者は、欧米（特に米国）に留学をする比率が高かった。私の周りでも多くの大学のKOL（Key Opinion Leader）、製薬企業の研究開発部門の責任者は海外留学の経験を持つ人たちが多く、文科省の統計によると、海外留学する日本人学生数は、2004年の8.3万人をピークに2010年は30%減の5.8万人、米国への留学生は1997年の4.6万人から約5割減の2万人を割る数と言う。この憂いを先週、ニューヨークの製薬企業のCEOに話しをしたら、「米国も全く同じだ。最近の若者は米国以外で働くことをノーと言うようになった。ただし、米国と日本の違

いは、米国は移民の国で、多様な価値観の人々を世界から引き付けるマジックがある。特に共通語としての英語はパワフルなツールだ。私の母国インドでは 26 もの違った言語があり、英語でないと国内でも対話が成り立たないからね。日本はその意味からも幸せな国でもあり、グローバルになれないという不幸な国でもあるね」という会話が印象的だった。日本の若者の留学離れをいろいろな視点から議論することはできるが、何よりも明白なことはグローバルな世界で競争をし、企業競争で生き抜いていくには、多様性のある他国・社会・組織に身を投じないとその実態は理解できないということである。日本は文化、学術レベルが向上し、海外留学をしなくても世界水準の研究論文や文献を入手できるようになったが、どのようなチーム・人物がどのような環境でその研究活動しているかは体感できない。現地の人たちと同じ空気を吸い、同じ釜の飯を食い、労苦を共にしてこそ「革新的な新薬」が誕生すると思うのであるがどうだろうか？

これからの若者、そしてそのような場を提供する責任のある経営者に大いに期待をするこの頃である。